

脱走大陸

八重野 充弘

毎年八月十五日が近づくと、あの人のことを思い出す。

戦後生まれの私には実体験はないが、ほとんどの日本人が、落胆と安堵で腑抜けのようになつていた八十年前のその日に、二十二歳の青年は異国の地で修羅の道への第一歩を踏み出した。

山あいの民陶の里で、偶然にも衝撃的な体験談を耳にしてからすでに三十年以上。夜を徹して紡がれたひとつひとつの言葉が、いまでも私の心の奥にへばりついている。

1

窯の口から火種が差し入れられた。一見乱雑だが、実は合理的に積まれた松の小枝が、それを待ち受けていたかのように、いきなりバチバチとはじけだし、立ち上がった炎が見る間に紅蓮の渦となつて窯の奥へ吸い込まれていく。

窯元は柏手を二回打つと、火に向かつて一礼し、私のほうを振り返つてこくりと頷いた。「いよいよですね」

私は身震いした。高ぶる気持ちを抑えられない。これから、夜を徹しての火の番が始まるのだ。このために、私は休暇をとつて東京からやつてきた。皿山訪問は二年ぶり、三回目のこと。

大分市で生まれ育つた私は、学生時代から数えるとすでに二十五年も東京暮らしをしてきたが、大手広告代理店での多忙な営業の仕事の合間を縫つて、たびたび帰郷していた。老父母と顔を合わせるのはいわばおぎなりの儀式のようなもので、実家に泊まることはほとんどなく、もっぱら旧友と故郷の田園を車で走り回つた。久住、国東、湯布院など、大分には心安らぐ場所がたくさんある。その良さを知つたのは東京へ出てからのことだった。そして、五年前に、やはり旧友に案内されて来た日田の皿山が、当時は私のいちばん好きな場所だった。

江戸中期に、福岡の小石原焼の分窯として始まつた「小鹿田焼」は、昭和初期に民芸運動の指導者、柳宗悦やなぎむねよしによつて全国に紹介され、昭和二十九年と三十九年の二度にわたり、ここで作陶を行ったイギリスの陶芸家バーナード・リーチが称賛したことでも有名になつた。半乾きの素地の上に白い化粧土を塗り、蹴轆轤けろくろで回しながら刷毛を当てて模様を作る「打ち刷毛目」、回転する器に鋼片を当てて刻みを入れていく「飛び鉋」、白化粧の上に櫛状の道具で模様を描く「櫛描き」、指で描く「指描き」といった技法に独特の味わいがあり、生活に密着した器の素朴さが人気をよんでいる。平成七年には十軒の窯元が国の重要無形文化財保持団体の指定を受けた。国内最高レベルの民陶だと思う。

清流に沿う狭い傾斜地に、肩を寄り添うようにして建つ窯元はどこもオープンで、観光客に作業風景を気軽に見せてくれる。私が何よりも気に入っているのは、集落全体に漂うなんともいえないのどかさだ。それは、いっさい機械を使わないことに最大の要因がある。近くの山から共同作業によつて採取された陶土は、水力を利用した巨大な鹿おどしともいふべき「唐臼」によつて細かく砕かれる。集落を散策すると、あちこちから聞こえてくる

「ギー、ドン」という音は、この唐臼が不休で動いている音。粉碎した陶土は水槽に入れてかき回し、上澄みだけを「おろ」という水抜き台に移して、手ですくえるくらいまで水分を取り除いたあと、ひと月ほど天日で自然乾燥させる。一連の作業はすべて自然任せ。大量生産とは無縁の、およそ現代離れした、非能率的な生産工程。それ故に、できあがった品物には温かみが感じられる。

私が二度目に訪れたのは、ちょうど窯出しの日だった。詰めかけた業者がごっそり買い占めていく。あとにはほとんど残らない。「打ち刷毛目」の八寸皿を三枚手に入れるのがやっとだった。親しくなった窯元に、窯焚きは夜を徹して行い、総焼成時間は三十時間にもなると聞き、一度それに付き合わせてもらえないだろうかと頼むと、快諾してくれた。

皿山にある十軒の窯元のうち、五軒は個人窯を持っていた。あとの五軒は共同窯を使う。その窯元は個人窯を持っていたので、比較的気安く、私の要望を受け入れることができたのだらう。そこで、十月初旬のこの日、三度目の来訪が実現したのだ。

小鹿田焼の里、皿山は、日田市から北へおよそ十六キロの山間部にある。二年前と同様、そのときも地元の友人の都合がつかず、私はひとりで行くことになった。東京からのアクセスは、空路福岡空港へ飛び、高速バスで日田へ入るのが最も早くて便利だ。JRの駅前から皿山までは路線バスが走っているが、便数が少ない。そこでタクシーを利用することになっていた。空港から電話で到着時刻を知らせておいたので、バスが日田駅前に着いたときには、すでに約束の場所に私のお気に入りのお車が停まっていた。

二年前に、たまたま乗ったのがこの骨董タクシーで、出会いのときの強烈な印象が脳裏に焼きついていていた。運転手の藤村和男さんは、個人タクシーを始めて十年になるそうだが、まず使っている車に驚いた。昭和三十年から生産されたトヨペットクラウンRS型という、とても骨董品だった。以前、藤村さんは、地元の銀行の運転手をしていて、その車は銀行の重役を務めていた人が、自家用車として大事に乗っていたのを譲り受けたのだという。「金歯」といわれた特徴ある前面のグリルは、小さいころ見た記憶がかすかにある程度で、ドアが観音開きになっていることは、このとき初めて知った。自動ではないから、客が乗車したあと外からドアを閉めるのは、確かにこのほうがやりやすい。いずれにしろ、こんな古い車がまだ走っていることが信じられなかった。ところが、藤村さんにしてみれば、驚嘆に値することではないようだ。

「エンジンやらなんやら、あちこち取り替えた部分はありますが、大方は昔のままです。ベントツのように丈夫に造ってあるので、きちんと面倒さえみてやれば、いつまじでん走ります」

車も車だが、実は藤村さん自身もまた骨董品の部類に入る。そうは見えないので、歳を聞いて驚いた。すでに喜寿を過ぎていているという。二年前のことだ。黒光りするボンネットをさすりながら、私は挨拶した。

「お元氣そうですね、お二人とも」

藤村さんはいくぶん歳をとったようにも感じられたが、相変わらず背筋はしゃんとしていて、運転に不安はなさそうだった。

「いつまで仕事を続けられるかはわかりませんが」

銀縁のめがねの奥の目を細めてそう言ったが、このぶんなら九十歳くらいまでは大丈夫

そうだ。おそらくそのころも、日本最高齢のタクシー運転手だったのではないだろうか。

皿山までの約三十分を走り終えたとき、時刻は正午を少し回っていた。見上げると、真つ青な空に文字通り刷毛で描いたような絹雲がたなびき、崩れかかった飛行機雲が二筋浮かんでいた。私はこの村でたった一軒の食事処である「山のそば茶屋」で、名物の山菜そばを食べるのも楽しみにしていたので、藤村さんを誘うと、嬉しそうにつきあってくれた。固辞するのをやつのことで説き伏せ、私は二人分のそば代を払った。

そのあと、藤村さんは「腹ごなしをせんと」といいながら、坂道をぶらぶらと窯元の家の玄関先までくっついてきた。そして、午後二時ごろの火入れまでそのまま村に居残ると、ついには、

「ワシも今夜はつきあわせてもらいますか」

と言いだした。

「どうせうちに帰ってもひとり。去年家内を亡くしたので」

寂しそうな笑顔を見せてそういう藤村さんに、彼とは旧知の間柄である窯元も優しくうなずいた。

「よかですよ。風邪ひかんようにしちください。ちょっと冷えてきましたから」

「なあに、こげん熱か窯のそばにおれば、風邪なんかひきようがなかです」

こうして、窯元父子と私たち二人の徹夜の火の番が始まった。

私がそこに求めたのは、あくせくした都会での日常生活とはかけ離れた安らぎだった。赤い炎を見つめながら、物づくりのありようを身をもって教えてくれる窯元と焼酎を酌み交わし、余裕のない日々の暮らしを見つめ直すとともに、自分の人生について、家族のことについて考えるつもりだったのだが、思いもかけない夜を迎えることになった。

きっかけは、窯の火勢が強くなってきて、窯元の目に真剣さが増してきたころ、藤村さんと窯元の間で交わされた会話だった。

「何度ぐらいあるとですか？」

「焚き口の近くは、そろそろ一二〇〇度に近づいてるでしょう」

窯の焚き方は、窯元の経験と勘だけが頼りだ。温度が一二五〇度を越すと、釉薬が流れたり作品にひびが入ったりする。最も神経を使うのがこのときなのである。

「飛行機が燃えたときの色によう似とる」

窯元は（えっ）という顔をした。私もそれを聞き逃さなかった。

「飛行機が燃えるのを見られたんですか？」
とっさに聞いただしていた。

「はい。昔ん話ですが」

藤村さんは窯の中をじっと見つめたままだった。

「事故かなんかですか？」

「いいえ、ワシが火をつけました」

一瞬、あたりの空気が凍りついた。

（どうしてまた）

その疑問の言葉が、すぐには出てこなかった。が、藤村さんのほうから、答えがぼつりぼつりと語られ始めたのだった。燃やしたのはソ連の戦闘機。ときは昭和二十年八月十六日。終戦直後のことだ。

藤村和男は大正十二年（一九二三）一月、日田高瀬村の小野家の次男として生まれた。太平洋戦争後に藤村家へ養子に行き、姓が変わる。高等小学校を出て十四歳で高瀬村役場に勤め、戸籍係などをやったが、小さいころから機械いじりが無性に好きだったこともあって、当時は日田でもまだ珍しかったタクシーの運転手になろうと思ひ、久留米に出た。十七歳のときである。

タクシー会社で車洗いなどをして働きながら、甲種免許（乗用車、バスの免許）を取得、すぐに九鉄（現在の西鉄）バスの運転手になった。

太平洋戦争が始まると、バスが軍に徴発されたので、電車の運転手に回された。自動車が好きで運転手になった和男にしてみれば、軌道の上を転がすだけの電車の運転は、まったく面白がなかった。九鉄には一年と少し勤務したが、徴用にとられ、久留米の四十八連隊で戦車の輸送を命じられる。小倉から久留米まで、戦車を運転して運ぶのである。

戦車の運転は電車よりは面白いが、夏の暑さには閉口した。三七式という当時の戦車は、運転席の両側に大型のディーゼルエンジンが裸で据えられており、窓が小さいから熱気がこもる。上半身から流れ出る汗が腹のあたりで溜まり、不快感この上もなかった。そのうえ、頭の上にいる教官が、革の編み上げ靴で右へ曲がるときには頭の右側を、左へ曲がるときには左側を、パカツと音がするほど蹴るのである。強く蹴られたら、スピードを上げろということだ。

どうにも我慢できなくなった和男は、たまたま大刀洗（福岡県三井郡）の陸軍航空隊飛行学校が練習生を募集していたので、試験を受けてパスし、入隊した。ここで通称「赤とんぼ」とよばれた小型複葉機で、一年半にわたり操縦の訓練を受ける。その後、熊本のカキ池にあった第九十九部隊飛行教育隊に配属され、少年兵の教育の任務にあたった。

およそ十カ月後に南方への転属が決まったが、大分港で待機していると、ソロモン諸島へ向かって先に出た船が、途中で魚雷を受けて沈没したという報が入り、たった二日で原隊へ復帰。それからまもなく、松山の航空隊へ移り、さらに編成替えがあつて、戦闘機十機の関東軍司令部航空隊への配属決定に伴い、満州へ飛ぶことになった。四十数名の操縦士の中からくじ引きで選ばれた和男らが、琵琶湖の飛行場を飛び立ったのは昭和十八年秋、二十歳のときだった。

機種は陸軍九七式戦闘機。昭和十年代の初めのころは、時速四百キロ台の速力を持ち、戦闘機としては世界最高とうたわれる名機だったが、すでにこのころは航続距離が短く、武装力も弱いという欠点をさらけ出し、第一線からは退いていた。満州あたりでならば使道があると判断されたのだろう、ともあれ十機は朝鮮半島で二度給油して、満州南部の遼東半島の付け根に位置する大石橋（ダイシキヤウ）へ向かった。ここで和男は、最初の危機に遭遇する。

中朝国境の鴨緑江（アムノック川）を越えるまでは割合視界がよかったのだが、大陸の内部に入るに連れて雲が多くなってきた。そして、目的地に近づき高度を下げたとき濃霧に包まれ、気がついたときは他機とはぐれていた。バッテリーがないから、無線での連絡は取れない。探し回っているうちに燃料も底をついてきた。時刻は日本時間で午後三時ごろだっただろうか。日が暮れてしまつてはどうしようもないので、やむなく不時着する

ことにした。

降りたところは、日本では考えられないような、何の障害物もないただっ広い草原。不時着にはそれが幸いしたが、生命の危険にさらされているのは明らかだった。やがてあたりが闇に包まれると、急激に気温が下がってきた。十一月ともなれば、満州の夜は底冷えする。飛行中なら、服には熱線が入っているの、通電して暖をとることができるが、むろんそんなことはできない。寒くて眠れないので、夜通し飛行機の周りをぴよんぴよんはね回っていた。

体を動かせば自然腹が減る。まさかこんなことになるうとは夢にも思っていなかったから、出発のときに配給を受けた、チーズや固形の卵、野菜などの非常糧食は、朝鮮半島に着くまでにきれいに平らげてしまっていた。水だけは水筒にまだ残っていたものの、喉の渇きよりも空腹のほうがこたえた。

（何か食い物はないだろうか）

夜明け前の薄明かりの中で、和男は目を凝らした。最初は雑草だけの草原かと思っていたが、よく見ると食えそうなものがないことはない。手始めに野生のニンニクらしいものを掘って食べてみた。ところが、あまりの辛さに吐き出してしまった。次に、ノネズミの穴がたくさんあることに気づき、靴下の糸をほどいてわなを作り、穴の入り口に仕掛けてみたが、警戒心が強くて全然顔を出そうとしない。

そこでネズミはあきらめ、小さな沼で魚を釣ることにした。靴下の糸と割ピンで仕掛けを作り、例のニンニクを餌にして垂らしてみると、運よくボラに似た魚が一匹釣れた。体長は二〇センチほどある。一食分にはなりそう。生のままかぶりつく。空きっ腹にはこの上ないご馳走だった。

あとでわかったことだが、この魚はソウギョで、寄生虫がうようよいるため、生で食べると普通の人ならひどい下痢をする。もともと胃腸が丈夫なのか、あるいは空きっ腹が寄生虫まで消化してしまったのか、まったく異常はなかった。水筒の水が尽きて、沼の水を飲んだが、それもなんともなかった。

そうこうしているうち、やっと三日目に救援隊が発見してくれた。翼を振って機が頭上を通過したときには、ほっとしてすうっと意識が遠のき、気がついたときは兵舎の医務室のベッドの上だった。

和男が入ったのは新しく組織された部隊で、齊齊哈爾、奉天（現在の瀋陽）、平安鎮と移動を続けながら、おもに八路軍を撃退する役目を担っていた。八路軍というのは、中国国民革命軍第八路軍の略称で、抗日戦争中（一九三七〜四五年）、華北にあった中国共産党の軍隊である。華中、華南にあった新四軍とともに、抗日戦の主力をつとめ、日中戦争後に中国人民解放軍と名を改め、現在の中国軍のもとになった。

和男は、実際の戦闘経験はほとんどなかった。一度だけ、旅順の近くで米軍機と遭遇したことがあるが、多勢に無勢だったので雲の中に逃げ込み、あとで仲間から「雲隠才蔵」とからかわれた。そのうちに視力が落ちたため、九七式重爆撃機の副操縦士となり、奉天から数十回、特攻機の護衛役として飛び立ち、自分よりも若い特攻兵の死にざまを臉に焼きつけることとなった。

そして、昭和二十年八月十五日、奉天から旅順へ向かう機上で終戦の知らせを受ける。初めは「終戦」の意味がわからなかった。とにかく、飛行機は全機着陸せよとの命令なの

で、奉天の近くの飛行場に降りるには降りたが、日本が勝ったのか負けたのか、はっきりつかめない。帰隊すると、先に着いた隊員同士が、上官、下士官の区別なく「さん」づけで呼び合っている。副官の命令だという。階級章も取るように命じられた。しばらくして、敗戦の事実と、将校たちが真つ先に逃げ出したことが知らされた。

終戦のとき、和男は満二十二歳になっていた。皮肉にも、彼のほんとうの戦いは、昭和二十年八月十五日をもって始まる。

すでに十五日中に、ソ連兵が近くまで迫っているという情報が伝えられていた。将校クラスや上等兵は、飛行機で逃げ帰ったというし、ほかの兵隊の多くもトラックでどこかへ消えてしまった。最後に残ったのは、和男と、新潟出身の河島栄治の二人だけだった。

（満州へなんぞ、もう二度と来ることはないだろうから、まあ、ゆっくりして帰ろうや。ソ連兵がやってくるのはまだ先のことだろう）

と、高をくくっていたのだ。

（倉庫には新品の衣類や毛布などが山積みになっている。これを置き去りにするのはもったいない話だ。一機残った爆撃機の弾薬倉に積めるだけ積み、パラシュートをつけて日田の実家付近の畑に落として、三隈川の河原に着陸する）

和男はそう計画していた。

ところが、十六日の夕刻近く、いざ出発という矢先に、早くも上空にソ連機が現れたのだ。

（しまった。十分も早く出発していれば）

と思ったがもう遅い。仕方なくソ連機を誘導して着陸させてやると、中から小銃を手にした二人のソ連兵が降り立ち、手招きをした。

和男と河島は、白旗の代わりにシーツの両端を持ち、手を挙げてソ連兵に近づいていった。相手は何事か叫んでいるが、二人ともロシア語はまったくわからない。どうせ向こうも日本語は解せないだろうと思って、前を見たままだ打ち合わせをした。

「ええか、隙を見て一、二の三でシーツをかぶするぞ」

二人が立ち止まると、ソ連兵は小銃を下ろして近づいてきた。身体検査でもするつもりだったのだろう。

「よし、やるぞ！ 一、二の三！」

気合いもろとも、ガバツとシーツを相手の頭からかぶせると、体をあずけて一気に押し倒し、ズボンのポケットに隠し持ったスパナでめちやめちやに殴りつけた。相手は小銃の引き金に指をかける猶予もなく、うめき声すら上げるまもなく、すぐにぐったりとなった。赤いものがしみ出したシーツの中の物体を、まるごと飛行機に乗せ、一〇メートルと離れていないところから、燃料タンクめがけて拳銃の弾を一発ぶち込んだ。

激しい爆音とともに、一瞬のうちに飛行機は炎上し、数分後には跡形もなく燃えつきってしまった。

「さあ急げ。続いてソ連機が来るかもしれん」

二人は大急ぎで爆撃機に乗り込み、エンジンをかけようとした。しかし、上空にはすでに二機目のソ連機が現れていた。

相手は戦闘機。もし二人が飛び立って逃げようとしても、追いかけられ、撃墜されてし

まうのは確実だ。万事休す。二人は観念した。
こうして、和男は初めて囚われの身となった。幸いだったのは、二機目のソ連兵が、燃えつきた自軍機に気がつかなかったことだ。気づいていたら、その場で報復を加えられたにちがいない。

3

「私と河島さんは、奉天の捕虜収容所へ連れて行かれました。そこは、つい何日前までは日本の警察の留置場だったところです。さあ、そろそろですたい。脱走と逃亡の日々が始まったのは」

藤村さんは、言葉を切り、古ぼけたちゃぶ台の上ですっかりさめてしまったお茶の残りをうまさうにすすった。そして、遠い昔を思い出すように顔を上げ、登り窯から吐き出される灰色の煙に視線をはわせた。いつのまにか、澄んだ空の色は群青色に変わっていて、暮色が濃くなっていることを知らされた。心地よい冷気が、じんわりと体を包み始めている。話の先を聞きたいのはやまやまだが、少し休憩を入れるのも悪くない。時間はたっぷりある。

「そうだ、すっかり忘れていた。うまい焼酎があるんですよ。そろそろみんなでやり始めましょう。体も温まるし」

自分が座っている簡素なベンチの下に転がしておいた焼酎のボトルを、私はおもむろに取り出した。福岡空港の売店で買い求めた、最近味が気に入っている地元大分産の「粕取焼酎」だ。酒粕を蒸留してつくったもので、ふつうの米焼酎とはちがう独特の香りがする。この焼酎に出会ったとき、最初は、戦後の物のない時期に米やイモでつくった質の悪い酒を思いうかべたが、それはまちが이었다。製法そのものがいまでは珍しいので、これは高級な蒸留酒の部類に入る。「初めて見る酒ですよ」といいながら、窯元の息子さんが、伏せてあった別の湯飲みを四個、ひっくり返して漆塗りの盆の上に並べてくれた。

「お湯割りにしますか、それとも」

私はず藤村さんに尋ねると、彼はかぶりを振った。

「いえいえ、私はまったく飲めません」

意外だった。アルコールを体が受けつけないのだという。

「銀行の運転手をやったりしたときのことですが、支店長を自宅へ送り、昼飯に出された奈良漬の茶漬を食べ、引き返そうとしたら、顔が真っ赤になって胸がどきどきですよ。悪いこつに、途中で警察の検問に引っ掛かった。酒は飲んどらんとゆうてん、相手は聞かんですもん。とうとう風船をふくらませることになっちしもうち」

「アルコールが検出されたんですか」

「はい。おかしかとは思ってたんですが、しょうがなかつた。始末書には『奈良漬は一切れ』を書きました」

本人も満面に思い出し笑いを湛えていたが、私たちはおかしさをこらえきれず、声を立てて笑った。

「ついでに、笑い話をもう一つ」

藤村さんも、話が横道にはずれたことを楽しがっている様子だ。

「その支店長が日田に転任しちきたばかりなときに、軍隊時代に世話になった班長を捜してくれんどうかちいうんですよ。手がかりは、日田人間じ、実家が川べりにあったということと、名字に『野』がつくことだけ」

窯元父子と私は、その話の先にどんなおかしな結末が潜んでいるのだろうか、期待に胸をふくらませて、耳をそばだてた。

「一日目は支店長といっしょに花月川のほとりを尋ねち歩きましたが、なにしろ漠然とした話じ、なんもわからん。二日目、今度は三隈川ん川べりをあたつちみようちいうことになったときに、支店長が『松山の航空隊で、その班長に何かと世話になってねえ』というのですよ。あれまち思うち『松山の航空隊ですか』と聞き返したら、『うん、熊本の九十九部隊にいて、それから松山へ行つた』っち」

（そうだったのか）
そこでやつと、私たちも先が読めてきて、おかしさがじんわりと喉の奥までこみ上げてきた。

「ワシは支店長に顔を近づけて、黙ってじいーつと見ち、『その班長の名前は、小野ちいませんでしたか』とゆうたら、支店長はたまげて、『そうだ、いまはつきり思い出した。小野和男軍曹だった！ きみ、小野軍曹と知り合いかね』

私は焼酎の入った湯飲みを盆の上に置き、両手をたたいて笑い転げた。

知り合いも何もない。養子に行つたから藤村和男になったが、かつての小野和男軍曹が、そのとき支店長の目の前にいたのである。

「いくら捜したつち、見つかるはずがなえわいねえ。自分で自分を捜しちよるんだから」
藤村さんもまた思い出し笑いをして、肩を揺すつた。

四人の笑い声がようやくおさまったとき、やおら、窯元父子が火の手入れのために立ち上がった。十分ほど時間が必要だというので、話の続きは待ってもらうことにしたが、何か喋っていないと落ち着かないのか、その間に藤村さんは私だけに次のような話をしてくれた。

「ワシはなんか知らんが、人との不思議な出会いを、なんべんも経験しちよります」

終戦間際のこと。藤村さんは、平安鎮から奉天へ向けて走つてた最後の軍用列車の中にいた。途中、まだ目的地までの半ばも行かないうちに、広大なコーリヤン畑の中で、八路軍の攻撃に遭遇して列車は停車した。敵はさほどの人数ではなかったとみえ、十四両編成の後部に乗っていた藤村さんまで応戦の役割は回つてこなかったが、ふと窓から外を見ると、畑の中に日本人と思われる女性がいて、身をかがめながらしきりに手を振っているのに気づいた。胸に赤ん坊を抱き、二歳ぐらいの男の子を連れている。このあたりに住んでいた日本の民間人は、みんな逃げてしまつてもういないはずだと思つていたのに、どうしたことだろう。このままここにいれば、どんな目に遭うかわからないから助けてあげたい。しかし、軍用列車に民間人を乗せるわけにはいかない。藤村さんは迷つたが、同情心のほうが勝っていた。

彼は軍用カップを小脇に抱え、小便でもするようふりをしてコーリヤン畑へ降り、女性にカップをかぶせて手を引き、男の子を抱いて列車へ引き返した。幸い、だれにも見とがめられることはなかった。そして、最後部の車両に積まれた軍用トラックの助手席に母子を座らせ、自分は運転席にもぐり込んだ。

ハアハアと息を切らす母子は、どちらも十分な栄養をとっていなかったらしく、ガリガリにやせ細っていた。それでも、この列車に乗り込むことができたからか、母親の目にはいくらか安堵の色が浮かんでいた。

列車が動き出すと、藤村さんは、この列車が大きな町に着いたら、すぐに逃げなさいと女性に告げた。いつ何時、八路軍の攻撃を受けるかわからないからだ。大きくうなずいたとたん、彼女は眠りに落ちた。そのとき、赤ん坊の足がずるっと下へ伸びた。そのあまりの青白さに驚き、そっと触れてみると、氷のように冷たい。赤ん坊の顔をのぞき込み、鼻をつまんでみたが、なんの反応もなかった。

母親に言っても、自分では捨てられないだろうと思い、そっと赤ん坊を胸元からはがしとると、彼はその遺髪を切り取り、列車が鉄橋を渡るときに、遺体を窓から川へ向かって投げ捨てた。その一部始終を、男の子は黙ってじっと見つめていたという。

列車が無事奉天にたどり着いたとき、藤村さんは赤ん坊を探す母親に、紙に包んだ遺髪を手渡ししながら、一部始終を語って聞かせた。慟哭する母を心配そうに見上げる男の子には、コンペイ糖の入った小さな紙袋を握らせた。

母子とはそこで別れたのだが、名前は聞いていないし、顔もろくに覚えていなかった二人に、藤村さんはおよそ十年後に再会するのである。

幾多の危機を乗り越えて、昭和二十四年に帰国した藤村さんは、日田の製材所にトラックの運転手として勤めることになった。そして、昭和二十八年ごろから、得意先である長崎市浦上の材木屋に、たびたび特産の日田杉を運んでいたのだが、三十年の正月、初荷を届けた後に雑煮をご馳走になることになり、居間に上がってくつろいだ気分になった。そのとき初めて、その奥さんが身の上話を始めたのである。満州からの引き揚げ者であること、終戦間際に日本の兵隊さんに助けられて軍用列車に乗せてもらったこと、その中で赤ん坊が亡くなり、兵隊さんに捨ててもらったこと。

驚いた藤村さんは、確認のためにいくつかの点を聞き返した。軍用カップをかぶせられて列車に乗せられたのではないか、赤ん坊は、母親が眠っている間に捨てられたのではないか。

声も出ないほど驚いた奥さんに、藤村さんは事実を明かした。その兵隊は私ですと。とたんに奥さんの目から涙があふれ、藤村さんの手をとってしばらくは泣き続けていたという。当時二歳だった男の子は十二歳になっていて、兵隊さんが赤ん坊を捨てたこと、コンペイ糖をくれたことをはつきり覚えていた。

「死んだあん子が、引き合わせくれましたと思いますね。実はあんあと、鉄橋の下に何回か行って赤子を探したですよ。見つかりませんでした。それにしても、縁ち不思議なもんですなあ」

藤村さんの話に胸が詰まり、私が黙ったままその内容を反芻しているところへ、窯元父子が戻ってきた。二人とも額に汗をにじませ、軍手が少しススで汚れている。

「お待たせしましたね。さあ、続きを聞かせてもらいましょうか」

湯飲みに焼酎をつぎ足して、ぐいっとあおった窯元が、そう促した。それを受けて、藤村さんの話が再開されたのだが、先ほどの二つの笑い話の余韻が残っているように感じられた。内容はシリアスなのに、なぜかおかしさをともなうのだ。

「収容所の房は、外から粗末な掛け鍵がかかっているだけで、私から見ちゃ逃げて下さい

ちいわれちよるようなもんですよ。房の中には便所がねえんで、用を足すときには外へ出ち、戻るときに鍵をかけ直さずにしちよけば、いつでも簡単に出入れます」

ただし、房から出ることに成功しても、すぐにソ連兵に見つかって逆戻り。なにしろ、収容所の周りはただっ広い平原で、身を隠すところといえばコーリヤン畑ぐらいしかない。コーリヤンは別名モロコシというイネ科の穀物で、栄養価が高い上に乾燥にも強いので、このあたりでは古くから栽培されている。夏になると背丈が二メートルを超えるから、身を隠すには好都合だが、間隔を置いて植えられているから、次のコーリヤン畑へ移動する間に発見され、すぐにジープで追いつかれてしまうのだ。

捕まると、罰としてまる一日分の食事が与えられず、屋外作業のノルマが多く課せられた。それでもへこたれず、藤村さんは五回も六回も脱走を試みた。脱走と捕捉が度重なり、番兵の顔にはしだいに笑みさえ浮かぶようになった。藤村さんは（性懲りもないやつだと、あきれ果てているのだろう）と思っていたが、実は、すでにそのころ、奉天市内には数百名のソ連兵が入ってきており、要所要所に配備されていたことがあとになってわかった。収容所からの脱出に成功したところで、日本へ帰るのはおろか、市内から脱出することも容易ではなかったのである。

しかし、こんな一見のんきな捕虜生活も長くは続かなかった。そして、もっと過酷で長い脱走と逃避の日々がすぐ近くに迫っていた。

4

朝晩の冷え込みが体にこたえるようになってきた。捕虜になってからの日数は、収容所の板壁に錆びた釘で「正」の字を刻み、記録していた。それがもう十個、つまり五十日を過ぎようとしていたから、その日はすでに十月に入っているはずだったが、外のようにが急に騒がしくなった。ソ連兵が慌ただしく動き回り、中国兵がそれを追いかけている。

「いよいよシベリア送りか」

年長の旧日本兵がぼそとつぶやいた。

「シベリアか」

ある程度予想をしていたことだったが、和男は落胆の気持ちこめてその地の名前を口にした。まもなく冬がやって来る。相当寒さの厳しいところらしい。寒いのはイヤだ。しかし、ここで抗っても仕方がない。現地に着くまでの間に、逃げ出すチャンスがあるだろう。それを待つしかない。和男は股の間に拳銃を一丁隠し持っていたが、それが役に立つとは思えないし、かえって身の危険を招くと考え、トイレに捨てた。代わりに五寸釘を一本、靴の裏に差し込んで隠した。

和男が乗せられた捕虜専用の貨車には、河島も含めて日本兵が二十四名いた。その班長に任命されたのが和男だった。脱走常習者としてマークされていたからで、白系ロシア人の通訳からいきなり釘を刺された。

「コノ中カラ一人デモ脱走スル者ガ出タラ、オマエハ銃殺サレル」

しかし和男は、

（どうせ連れていかれた先でも殺されるに決まっている。それなら逃げたほうがましだ）と腹をくくっていた。

列車が動き出したのは正午過ぎだった。いつものように、昼食として与えられたライ麦の黒パンとひとかけらのチーズを胃袋に収めると、班長の和男は全員に脱走計画を提案した。貨車に一カ所ある扉は、外側に大きな掛け金錠がついていて、それを八番線の針金で三回巻いただけ。太さが四ミリあるが、隠し持った五寸釘で根気よく削ればなんとかなる。

兵の意見はちょうど半々に分かれた。脱走に賛同したのが十二名。そして、二日目の夕食後から、屋根伝いにやって来る歩哨の目を盗んで、針金を削る作業を開始した。時計は没収されたから時刻はわからなかったが、深夜になって三本目の針金がぷつりと切れた。腕の細い人が扉のすき間から手を伸ばし、掛け金を外して準備がととのった。

深夜の歩哨が去ったあと、まず和男と河島が飛び降りる。進行方向に向かって、仲間に背後から突き落としてもらった。柔道の受け身の要領で肩を入れて地面を転がり、右手をついて回転を止める。降りたところはコーリヤン畑の縁だった。続いて数名が先方で飛び降りた。あとに続く者は和男の元に集合することになっている。

ところが、四人目が駆けつけてきたとき、突然バラバラッという自動小銃の音が響いた。「見つかったか！」

思わず地面に伏せて目だけで列車を追う。停まるのかと思ったが、列車はそのまま闇の中に消えていった。しばらくして二つの影が忍び寄ってきた。仲間だ。

和男を含む六名の脱走兵は、コーリヤン畑の中で息を潜め、後続者を待った。だが、小一時間が経過しても現れる者はいない。残りの六名はどうなったのだろうか。

「仕方ない。行動開始だ。全員いっしょだと目立つからまずい。バラバラになって逃げて、二カ月後の十二月三十一日に大連で会おう。場所は駅前の広場だ。ええな」

和男の提案に誰も異存はなかった。一時間おきくらいに一人ずつその場を離れていく。みな南をめざした。とりあえず遼東湾へ出よう。半島の突端にある大連が最終目的地だ。大都会に潜入できれば人目につきにくい。しかし、いまいる場所から大連まで、いったいどれくらいの距離があるのだろうか。奉天から湾まではおよそ一六〇キロだが、列車は奉天を発つと北上を続けた。時速二〇キロほどののろろ運転で、ときどき長時間停車することがあったが、一日半の間に少なくとも二十時間は走っている。すなわち、一六〇キロプラス四〇〇キロ。それが彼らがこれからたどらなければならない距離だ。しかも、暗くてよくわからないが、ほぼ三六〇度、地平線まで星が見える。和男は初めてこの大陸に辿り着いたときの絶望感を思い出していた。飛行機の燃料が切れて、大平原のど真ん中に不時着したのだった。あれから二年がたつ。

東の空が白みはじめたころ、和男はしんがりで出発した。底冷えがして、自然に体が震える。着ているのは一張羅の軍服。このままではあまりにも目立ちすぎる。すると、前方に人影が見えた。早朝の野良仕事にやってきた現地の農夫だろう。

和男は地に伏せて相手が近づくのを待ち、頃合いを見て背後から襲いかかった。農夫は和男よりやや小柄だった。背中に体を密着させると、首に左腕を回し、右手を絡めて強く締め上げる。農夫は「うっ」と声を上げただけで、まもなく気を失った。

素早く服を剥ぎ取り、軍服を脱ぎ捨てて着替えた。大きさは問題ない。木綿でできているのだろうか、軟らかくて着心地はよかった。脱いだ軍服は農夫が持っていた鍬で地面を掘り、三、四十センチの深さに埋めた。それから、早足で現場を離れた。できるだけ遠くへ逃げなければならない。延々と続くコーリヤン畑の中を、人目につかぬよう歩を進めた。

早朝ということもあり、幸い近くで人に出会うことはなかった。

日が昇ると、畑の中に身を潜めて睡眠をとった。以後、昼間は動かず、夜間に移動する日々を送った。食料はといえば、農村地帯だから畑から直接得られるものもあったが、おもに昼間、農作業のために住人が出払ったところを狙って人家に忍び込み、餅子びんずやちよつと風味の違う味噌を盗んだ。次第に寒さが増してきたので、服も多めに手に入れ、袋に入れて夜間の移動中は肩に担いだ。三角形の竹笠も手に入れてかぶったから、遠目には現地人らしくなったが、問題は靴だった。編み上げの軍靴のままでから、むき出しだとがっしりしすぎていて日本兵と悟られても仕方がない。中国人は足のサイズが小さいらしく、自分に合う代わりの履き物が見つからないのだ。やむを得ず、ぼろ布を膝のあたりに巻き付けて垂らし、靴を隠すようにした。

肉体的にも精神的にもギリギリの状態のもとでの逃避行。先の見えない日々が続いた。しかし、一度たりともおとなしくシベリアに送られたほうがましだったなど考えることはなかった。むしろ、苦しさが増すほど、

（なんとしても逃げ切つてやる。海を渡り、ふるさとの土を踏むんだ）

という強い気持ちで体の芯からわき上がってくるのだった。食べ物、相変わらず人のいない人家に忍び込んで、コーリヤンを挽いて作った餅子やコーリヤン粥を盗み食いつた。食べ終わったら両手を合わせ、心の中で（ごちそうさん）と礼を言うのを忘れなかった。

逃避行もひと月半を経過した。

（ほかの連中は無事だろうか？）

自分自身も限界が近づいていたが、一緒に脱走した五人の仲間のことも気になる。

周りの景色が少し変わってきた。それまでは見渡す限りの畑の中に、ポツンポツンと農家が散在するだけだったが、にわかに建物の数が増えてきて、町らしくなってきた。商店のようなどころもある。看板に「錦州」という文字を見つけて、和男は海が近いことを確信した。海とは遼東湾のことだ。行き交う人の数も多くなってきたが、危険に感じるよりも、むしろ現地人に紛れることによって安全性が高まったように思えた。見かけはなんとか中国人らしさを保っている。喋りさえしなければ問題ない。ただし、相変わらず昼間は隠れ場所を探して睡眠をとり、夜間に海を目指して歩いた。

それから一晩歩いて東の空が白んできたころ、ついに海へ出た。潮の香りを嗅ぐのはいつ以来だろう。浜には早朝から漁師たちの姿が多い。和男は小舟を盗んで海岸伝いに大連をめざす方法を思いついた。

（夜になったら行動に移そう）

すでに十二月に入っているはずだ。このあたりの緯度は、日本の青森あたりと同じ。天気さえよければ昼間は過ごしやすいが、夜は零度を下回ることがあるから、服を何枚も着重ねないと耐えられなかった。

（大連に着けば、きっとなんとかなる。日本に帰る船も出ているはず）

当てにはできないが、それが和男にとって一縷の望みだった。

水平線に日が沈む。急激に空気が凍えてきた。和男は目をつけていた漁村のはずれの網小屋の近くにあった小舟に近づいた。人気はない。砂浜が続く波打ち際までの距離は百メートルはないだろう。なんとか引いていけそうだ。

音をたてないように、船首に着いている綱をそつと引つ張つてみた。ズルツと舟が動く。和男は手応えを感じ、より強く綱を引いた。砂浜は海に向かってわずかが傾斜しているので、勢いがつくと割合スムーズに引いていくことができた。ただ、砂地に長く跡がついたのが気がかりだった。

（できるだけ早く沖へ漕ぎ出そう）

和男は波打ち際に着くと、舟の後ろに回り、力一杯押し出すとひよいとジャンプして内側に滑り込んだ。そして木製の櫂を手に取り、必死に漕ぎ出した。

そのときだ。

「ヨウレンライ！」

という甲高い男の声がした。（誰か来て！）という意味だ。すると、しばらくして複数の足音が波打ち際まで近づくのが聞こえた。

「チンジェイ！」

鋭い声で何かを叫んでいるが、わかるのは（止まれ）という言葉だけだ。八路軍にちがいない。旧日本兵狩りの任務を帯びているのだ。和男は漕ぐ手に一層力を入れた。しかし、思うようには進まない。すると、闇をつんざいて銃声が響いた。とっさに身を伏せると、和男の耳の近くを銃弾がかすめた。銃声は続けざまに響いた。ブスブスツと、確実に二発は舟に着弾した。外側の船縁に全身をあずけ、舟を傾かせる。弾よけにするためだ。だが、さらに二、三発を被弾し、木片が顔まで飛んできた。

万事休す。

和男は海に飛び込んだ。策があつたわけではない。直感的にそのほうが逃げのびられると思っただけ。水練は得意だ。子どもころから、夏場は故郷の川で一日中泳いでいた。ところが、水の冷たさは想像を絶した。無数の針が全身を包みこんでいるようだ。おまけに足が重くて水を蹴ることができない。仕方なく、水中で軍靴を脱ぎ捨てると、懸命に舟を離れた。銃弾は断続的に放たれ、舟だけを狙っているようだ。暗闇が味方してくれた。限界が近づいてきたのを感じた。もう腕が上がらない。蹴る力もない。ただただ氣力だけで前へ進もうと、全身をばたつかせた。

つま先が何かに触れた。砂のようだ。眼前に薄ぼんやりと岩のようなものが見える。いつの間にか岸辺に近づいていた。距離はだいぶ稼げたはずだ。もう銃声は聞こえない。浅瀬に辿り着くと、四つん這いになって大きく息をした。激しく咳き込む。思わず手で口を覆った。やつとのことで顔を上げて見渡すと、動くものはなにひとつない。耳に入るのは波の音だけ。

ふうと、今度は安堵の息が出た。身を起こそうとした。ところが、体が思うように動かない。バリバリツという音がする。服が凍りついていいるのだ。しかし、ここにじつとしていいるわけにはいかない。追っ手はまだ搜索の手を緩めてはいないだろう。体力はまだ残っている。力の限り遠くへ逃げよう。

和男は立ち上がると服を剥ぎ取り、ふんどし一丁になった。服は岩陰の目立たないところに隠し、ふんどしを絞って水気を取ると、波打ち際を南へ向かつて走り出した。幸い砂浜が続いていて、裸足でも痛みを感じることにはなかった。痛みはむしろむき出しの肌を容赦なく襲った。いくら走つても、体の芯が温まるまもなく外気が体熱を奪ってしまうのだ。どれくらい走つたのだろう。意識が朦朧としてきた。確実に、二度目の限界が近づいて

いる。ふと、かすれた目に人家の明かりがとびこんできた。

（もしかしたら愛川村に入ったのか？）

ぼんやりとした頭の中にその地名が浮かんできた。大正の初めから日本人の移民が始まり、満州開発の基盤となった村だ。

人家が目の前に近づいたとき、和男は意を決した。

（もはや死は目前に迫っている。八路軍に捕まって撃ち殺されても同じこと。万に一つの幸運に賭けてみよう）

そして、明かりの見える扉をたたいた。

「助けてください。私は日本人です」

崩れ落ちそうになるのをなんとかこらえて、扉の前に立ち尽くした。やがてすつと扉が開き、四十代と思われる女性が顔を出した。そのときに耳にした言葉を、和男は忘れたことがない。地獄に仏とはまさにこのことだ。

「まあ、とにかく中にお入りなさい」

まぎれもない日本語だった。どっと涙があふれるのをこらえきれず、その場にへたり込むと、

「私は日本兵です。追われて海を泳いでここまで来ました」

これだけは言っておかないかという思いから口に出した。しかし相手は驚きもせず、
「私も日本人ですよ」

とだけ言って、とりあえず和男の体を毛布で包み、風呂の準備を始めた。

五右衛門風呂には残り湯があったが、それに水を入れてぬるま湯にすると、婦人は和男に手招きをした。体が冷え切ったときにいきなり熱いお湯に入ると凍傷を起こす。婦人にはその知識があったのだ。薪がくべられ、湯がだんだん温まってくると、とめどなく涙が流れ出た。すすり上げながら、和男は名前と年齢、出身地、身の上話をした。

風呂から上がると、オンドルのきいた部屋で、婦人は豚肉のすき焼きをこちそうしてくれた。これほどよいものを、これまで口にしたことはない。その上、暖かい夜具までもが用意され、彼は天にも昇る気持ちで布団に潜り込んだ。また涙が湧いてくる。両手で拭っているうちに、いつしか眠りについていった。

翌朝、朝餉のときに婦人が身の上話を始めた。名は藤村ミサオ、同じ大分県の中津の出身だという。昭和の初めに警察官の夫とともにこの地にやってきたが、夫が馬賊に殺害されたため、その恩給で土地を買い、現地人を五十人も雇って農園を営んでいるという。ほかに家族はいない。

「日本兵狩りが厳しいから、ここにかくまってあげても、見つかってしまう。大連なら日本人も多いし、隠れ場所もあると思うので、知り合いを紹介してあげるから、大連に行きなさい」

婦人は和男のために中国服を用意してくれ、防寒帽をかぶせて顔を隠し、雇っている現地の男を一人、案内人として同伴させてくれた。大連の親戚あての手紙は、見つからないように服の背の内側に隠し、男には、

「これは私の息子で生まれつき口がきけない。大連まで連れていっておくれ」

と頼んだ。和男は目だけで精一杯の感謝の意を表すと、すぐに愛川村を出発、徒歩で大連に向かった。途中、八路軍の検問に三度引っ掛かったが、黙ったままでの案内人

の男が説明してくれ、なんとか通り抜けることができた。

大連に着くと、藤村さんの親戚の石田さんの家を見つけ、案内人を帰したところで、藤村さんより少し年上と思える奥さんに手紙を渡した。奥さんは事情を察し、危険を承知でかくまってくれた。大連でも日本兵狩りが厳しく行われているという。日本人の家には毎日戸籍係が調べに来て、家の中をくまなく調べ、登録している人間以外の者がいると、容赦なく警察に連れていかれる。外出するときには許可証を購入しなければならなかった。

5

「石田さん、よくもまあ、かくまっくれたと思いますよ。見つかったらただじゃすまんですもんね。そんなわり、私も用心には用心を重ねち、床下で三カ月を過ごしました」

藤村さんは昔の記憶をたどるように遠くを見つめた。視線の先には十三夜月が浮かんでいて、薄墨を流したような空をバックに、山の稜線に並ぶ針葉樹がシャープなシルエットを映している。

「日本兵だけでなく、満州におった日本の民間人も、みんな苦勞されましたよ。財産は取り上げられるわ、ソ連兵に踏みにじられるわで」

日本とソ連との間では、一九四一（昭和十六）年に結んだ中立条約があった。それなのに、四五（昭和二十）年四月になって、ソ連は一方的に破棄を通告、終戦間際の八月八日に宣戦布告してきた。

北から満州に侵攻したソ連兵の男は、女性を見つけると、手当たり次第に、年齢も関係なく捕まえて強姦した。五十歳近い藤村の奥さんも危ないというので、男物の服を着て、顔に煤を塗りつけた。幸い無事だったが、隣家の奥さんはピストルを突きつけられて、夫の目の前で強姦されたという。被害に遭った女性の中には、精神を病んでしまう人も多かった。難を逃れる最も効果的な方法は、咳をすることだった。ソ連兵は肺病を極端に恐れていたので、咳をする女性だけは敬遠した。

「強姦されたんは女ん人だけじゃなかですよ」

藤村さんはこともなげに言った。

「といいますと？」

話の先の予想はついたものの、まさかという気持ちもあったので、あえて私は尋ねた。「カチューシャ部隊ちゅう、女性兵士ばかりの部隊がありました。えらい逞しいおなごの集団で、四、五人がかりで押さえつけられると、男でん身動きでけん。いや、ホントの話ですよ。被害者から直接話を聞きました」

窯元父子も私も、口をぽかんとあけ、目を丸くした。そのとき、窯元の住まいのほうから足音がして、奥さんが近づいてきた。両手で大きな盆を抱えている。

「遅くなりました。皆さんおなかがおすきでしょう。うちはいつも夕食の時間が遅いもんだから」

見ると、ふたのついた四角い箱が四つ。窯元の息子さんが、横から手を出してふたをとって、にんまりとした。

「せいろ蒸しじゃないですか」

私もとっさに声を上げた。

うなぎのせいろ蒸しは日田を代表する料理のひとつで、ふつうのうなぎ重とのちがいは、蒲焼きの下に色鮮やかな錦糸たまごを敷いて、せいろで蒸す点だ。窯元のすすめに従って、私たちはとびきりのごちそうをいただくことになった。日田市内の名店から取り寄せたもののようなだった。それだけではない。赤飯と山菜おこわのおにぎりが夜食用に用意してあり、うまそうな漬物も添えてあった。なんとも贅沢な晩飯である。

「愛川村で助けてくれた奥さんは藤村さんとおっしゃったんですね」

空腹が満たされ始めたころ、私は藤村さんに問いかけた。

「はい。当時私は小野とゆうちよりしましたが、今は藤村。ご想像通りです。あんどきやニセの息子でしたが、そのあとでほんとうの息子になりました」

(やはり)

思ったとおりだった。奥さんは早くにご主人を亡くし、ひとり暮らしだったと記憶していた。帰国後に養子に入ったことだろう。藤村さんは先取りして話を継いだ。

「帰国して、私は日田に、義母はいったんは中津に帰りました。親戚の者にあつちでん出来事を話したら、みんなが口を揃えち『そりゃあ、命の恩人をひとりにしたらいけん、すぐ迎えに行っちやらんと。おまえが面倒をみらんちゅうなら、親戚でお世話する』と言うもんで、はい、日を置かず訪ねていきました」

「そら、お義母さんも喜ばれたでしょう」

窯元もほっとしたようすで口を挟む。藤村さんはにっこりうなづいて、さらに話を続けた。

「叔父に住まいを一軒世話してもらって、義母も日田で暮らしてもらうことにしました。そしたら義母が、『あんたも嫁さんをもらわんと』ち言うて、まだ嫁にいとらん親戚の娘との結婚話を進めるとですよ。『ちよつと年が離れとるかもしれんが』ち言うんで、『はいはい、だいぶ年下でも、お義母さんがそげえ言うなら』ち、すすめに沿うち結婚しました」

「めでたしめでたしですなあ」

焼酎のお湯割りを口にしながら、窯元が相好を崩した。

「ところがです。年下と思うとった嫁が、実は五つばかり年上でした。ウワッハッハッハ」藤村さんは豪快に笑い飛ばした。一気に場が和み、みんな腹が減っていたこともあって、しばらくは無言でせいろ蒸しをパクついた。

胃袋が落ち着いたころあいをみて、私は尋ねた。時間はたっぷりあるから、けっして先を急がせるつもりはなかったが。

「大連到着は昭和二十年の十二月ですよ。帰国されたのはいつですか？」

「昭和二十四年の三月です」

「ということは、三年以上足止めを食ったわけですよ」

「はい、その間に一波乱も二波乱もありました」

真顔にもどった藤村さんは、空になったせいろに蓋をすると、ふうと大きく息をつき、湯飲み茶碗を両手でなで回した。

床下生活を始めてひと月がたった。石田家は日本式の家屋でオンドルの設備がなかった。床下に畳二枚を敷いてくれたが、湯たんぼ二個だけでは厚めの布団でも冬の寒さが体にこたえた。あのときほど、春の到来を待ちわびたことはない。

便所や風呂場は、人目を避けて使わせてもらうことができたが、食事はそうもいかない。最中に戸籍係に踏み込まれたりしたら、言い訳ができないからだ。痕跡も残る。そこで、石田の奥さんが床板をめくって食事を上げ下げしてくれた。

あるとき、奥さんが伸び放題になった和男の髭と髪の毛を見て、いくらなんでもと気を遣ってくれ、昼間、見回りの戸籍係が去った直後に部屋に上げ、裁ちばさみを使って手際よく刈ってくれた。髪の毛は、中国人の中にもよく見かけるオールバック。髭は自分でそり落とした。

首から上がすっきりすると、気持ちも大胆になって、
(ちよっとその辺を散歩してみようか)

と、夜が更けたころ、床下の通風口の鉄格子を内側から取り外し、狭いすき間からやつの思いで家の外へ出た。かびの匂いが混じらない久しぶりの外の空気。どこからか饅頭の匂いがしてくる。遅くまでやっている店があるのだろう。このあたりは大連の中心部からは外れているが、住宅と商店が混在するそれなりに町の雰囲気をもった地域である。

和男は空腹を感じた。ポケットには小銭がある。饅頭の一つくらいは買えるだろう。足は自然に匂いの方角に向いていた。

店の提灯らしいものが見えてきたとき、ふと右側にある三階建ての大きな建物が気になって見上げると、「白蘭荘アパートメント」という日本語の表示が目に入った。和男はその名をどこかで聞いたことがあった。昭和十二年に清水組が建てた高級アパートで、日本人の上級役人などが入っていたはずだ。しかし、明かりのついた部屋はほとんどなかった。ゆっくりと歩を進めながら、入り口を通り過ぎようとしたとき、中から派手な服装をした若い女が出てきた。

(こんな時間に?)

と思ったとたん、女と目が合った。

(まずい!)

目をそらしたがまにあわなかった。

「あんた」

日本語だ。和男が日本人であることを見破っている。

(どうする?)

彼は迷った。逃げたり知らんぷりをしたりすると、怪しまれる。

「あ、はい。あなたも日本人ですか」

できるだけ平静を装ってそう答えた。女は無言でにじり寄ってくると、二重まぶたの大きな目を見開いて和男の顔をじっと見つめた。

「九州訛りのあるね。出身はどこ?」

意外な言葉が発せられた。

「はい、大分の日田であります」

「あら、近かねえ。アタシは筑豊よ、田川。知つとるね」

「はい、もちろんです。なんべんも通ったこつんあります」

相手にのせられる格好で、会話が進んでいる。

「こげん夜中に、どこに行くとき？」

「饅頭でも食おうかと」

「あら、アタシもたい。行こ行こ」

思わぬ展開に狼狽したが、ここは成り行きに任せるしかない。腹をくくると、和男は大腿で饅頭屋の提灯をめざした。

幸い、ポケットの小銭は饅頭が二個買えるだけであつた。和男が黄色い中華帽をかぶつた中年の店主に、手振りで別々の紙に包むよう伝え、黒ごま入りの餡饅二個分の代金を払うのを、女は黙って見ていた。湯気が立つ熱々の饅頭が入った包みの一つを女に渡して、来た道を引き返す。アパートメントが近づくと、女は明るい声で言った。

「ねえ、アタシの部屋で食べていきなつせ」

「あ、いや。そげんわけには」

「よかたい。そげんしなつせ」

女は和男の袖をつまんで引いた。いよいよ困り果てたが、なぜか拒否する勇気がわいてこなかった。かといって、何かを期待する気持ちがあつたわけでは毛頭ない。ただ、あれだけ危険な脱走を繰り返してきたというのに、やや迂闊だったことは否めない。

アパートメントの無人の廊下を乾いた音をたてて歩み、女は一階のいちばん奥の部屋のドアを開けた。鍵はかかつていない。

「はいはい、中に入つて」

促されて和男は入室する。かすかに芳香が漂っていたが、予想に反して飾り気のない部屋だつた。といつても、彼はそもそも女の部屋というものを知らない。ただ想像していたものと違うというだけだ。若い女の部屋には、人形だの絵だの花だのが飾つてあるものと思つていたのだが、家具がそれなりに揃つている割に、上に置かれたものが何もない。ただ、やたら引き出しが多いのが気にかつた。中に何が入っているのだろうか。

さすがにじろじろと眺め回すわけにはいかないので、なるべく顔は動かさないようにして、素早く視線を送つて観察するにとどめた。女は和男が見たこともない道具を使つて湯を沸かしお茶を淹れると、二つの湯飲みとおしぼりを二本、部屋の中央に置かれた小ぶりの円テーブルの上に置いた。人並みに気配りのできる女性であることを、とくに不思議には思わなかつた。テーブルの周りには西洋風の木製で革張りの椅子が三脚。ふと、なぜ三脚必要かが頭をよぎつたが、

「さあ、食べまっしょ」

という女のひと声で我に返つた。

また十分に熱い饅頭を口に運びながら、女は名前と年齢を告げた。麻生キヌ子、二十七歳。女性として十分に成熟していることが年齢からもわかる。化粧は厚いほうかもしれないが、もともと美人の類に入るのはまちがいない。ただ、この部屋でひとり暮らししているようで、男の気配もなかつた。仕事は？ 何をしに福岡からこの大連にやってきたのか？ ふつうなら、聞かねばならないことがあるが、聞く気にもならないほど緊張しているし、聞けば自分のことも話さないわけにはいかない。それは何としても避けたかつた。

「私は藤村和男、二十二歳であります。愛川村の親戚の農場の手伝いをしちよりましたが、

こっちの別の親戚の店で人手がいるというんじ、ひと月ばかり前からこっちに来ちよります。住まいはこの近くです」

それだけ言つて、饅頭の残りを口に入れ、お茶で流し込むと、和男は腰を浮かせた。一刻も早くここを出たかった。すると、キヌ子はそれをさえぎるように、彼の脇に椅子を寄せてきた。ほわっと、化粧水の香りが鼻の奥まで届いた。

「あら、よう見ると、あんた、けっこうよか男ね」

思いもかけぬ言葉に視線が宙をさまよう。和男の動揺をよそに、キヌ子はさらに大胆な行動に出た。椅子ごとにじり寄り、片方の手を和男の膝にのせた。硬直した体が自分のものとは思えなかった。金縛りとはこういうことをいうのか。声も出ない。

キヌ子は視線を和男の目に据えたまま、彼の太ももの上にある手をずずっと這わせた。それが脚の付け根まで届いたとき、和男の体に明らかな異変が起こった。

「あら、もう反応しとるね」

子どもがいよいよやをするように、和男は首を小刻みに振ったが、それを抵抗というにはあまりにもむなしかった。キヌ子の手は獲物を追うヘビのようにさらに這い上がり、ついには和男の股間に達した。そして硬くなったものの先端を三本か四本の指でなで回した。

「あつ、ちょ、ちよつと」

何かを言おうとする和男の口を、キヌ子の口がふさいだ。それまで女性をこれほど身近に感じたことはない。

身じろぎ一つできず、ただ目をつぶり、無駄とは知りながら胸板を破って飛び出してきそうな心臓をなだめようともがいているうちに、キヌ子は和男のズボンのボタンを外し、ふんどの脇から現れた屹立したそれに直接触れた。軟らかく、温かい手がそれを包みこむ。もてあそぶように、掌が少し絞り込まれた。

「くっ」

重なり合った二人の唇の間から、和男のうめき声が漏れた。

「ふふっ」

笑いを含んだキヌ子の吐息が和男の顔面に降りかかる。彼女の手がじんわりと動き始め、次第に速度を増していった。もはや限界だった。和男は歯を食いしばり、眉間に深いしわを寄せた。

その瞬間、和男は体の真ん中の皮膚が張り裂け、そこから体内にあるもののすべてが、魂の一部と一緒にになって射出されたように思えた。

キヌ子の顔が離れていくのを意識するとともに。体中の力が抜けていき、とろけるように椅子に沈み込んだ。それからいったいどれくらいの時間が過ぎたのだろうか。

徐々に意識と体の感覚が戻ってきて、ふと薄目を開けると、足もとで何かがうごめいていた。雑巾のようなもので床を拭いている絹子の姿だった。

「あ、す、すみません」

絹子はゆっくり振り返り笑みを見せた。

「よかとよ」

ようやく我に返ると、股間のものがむき出しになったままであることに気づき、和男はあわててそれをしまい、ズボンのボタンをかけた。言葉を発する気にはなれない。というより、何も言葉が見つからなかった。キヌ子が台所のほうへ向かったのを見て、素早く腰

を上げた。まだふらつとしたが、両足でしっかり床を踏みしめる。

「すみません、これで失礼します」

相手の顔を見ることはできなかったが、気配で振り返ったのはわかる。思いがけない言葉が返ってきた。

「饅頭、ごちそうさま」

7

時計のデジタル文字が零時十五分を示していた。闇が次第に漆黒に染まりつつある。登り窯の焚き口だけが頭上の裸電球の助けもあって薄ぼんやりと浮き上がっていたが、そこにいるのは男だけ四人。藤村さんの赤裸々な告白は、そのような場面が生んだものだった。

「おなごと直接触れおうたんは初めてでした。わけんわからんまま、そげんこつになつてもうち。ワシも男ですたいね。抵抗するより、なるようになれという気持ちじ。慰安所に行くときはまったくちがう感情でした」

「慰安所？」

思いがけない言葉が出てきたので、私は聞き返していた。

「はい、奉天におったときんこつです。あそこからも特攻が出ちよつたとですよ。飛び立つ前の晩、若いもんを連れち慰安所に行きよりました。ワシは彼らが漏らす声を聞きながら外で待つだけです。若いもんちいうても、ワシより二つか三つ下なだけです。たまたまワシは目が悪うなつち、指導する立場になったわけですが、彼らと同じ運命をたどつても、なんの不思議もありまつせんでした。一回五、六人だったですかね。中には待つとるあいだに、物陰でシコシコやるやつがおるわけです。こうしとかんと本番があつという間に終わるち言うとですよ。連れて帰るとき、彼らは口々に礼を言いますし、涙を浮かべるとるもんもおりました。もちろん、次の日に飛び立っち、帰つちくるもんは一人もおりまつせんでした」

いっときの静寂がいっそう闇を暗くした。ふと焼酎のボトルに目をやると、まだ半分以上残っていた。意識して酒をセーブしたつもりはないが、話を聞くことに集中していた結果だ。

藤村さんの口が少し重くなっているのを感じ、私は久しぶりに湯飲みに焼酎を注ぎ湯で割った。ついでの、夜食にと用意された山菜おこわのおにぎりを一個手に取った。藤村さんも赤飯のおにぎりを取り、口に運んだ。わずかながら空気が和んだ。

窯元の息子も、

「この焼酎、ウマイですね。初めて飲みました」

「ほう、この味がわかるとはいいたもんだ。案外酒飲みなんじゃないですか？」

私が茶化し気味に言うと、窯元が口を挟んだ。

「案外どころじゃなかとですよ。なあ」

息子は頭をかいてはにかんだ。

「高校の野球部ん先輩に鍛えられました。いや、もちろん現役のときじゃなかつた。卒業してだいぶたつてからです」

少しも言い訳に聞こえない言葉に、私の頬もゆるんだ。

「野球をやっていたんですね」

「それでも、甲子園に出たことがあります」

窯元がちよっぴり息子自慢をした。息子は火照った顔を横に振りながら、「ベンチでした」と付け加えた。

「そろそろまた」

窯元に促されて息子も立ち上がり、二人で何度目かの火の手入れに向かった。残された二人の間にはしばらく沈黙の時間が流れた。私は手持ち無沙汰に焼酎のお湯割りを作り、ちびりちびりと口に運んだ。ふと、聞くならここしかないと思い、先ほどから気にかかっていた言葉を吐き出した。

「その女の人はその後？」

返答を待ったが、藤村さんの口はすぐには開かなかった。そのわけはあとではっきりするのだが、このときは、

「なんべんか会いました。なにせ、同じアパートに、住むこつになったもんで」

と、途切れ途切れに言葉を発したただだった。どういう事情でそうなったか、いずれ語られるにちがいないと思い、それ以上問い詰めはしなかった。

「それどころではなかったんです。仲間と落ち合う日が近づいとりました」

そうだ、思い出した。列車から脱走に成功した六人は、二カ月後に大連で落ち合う約束をして、バラバラに逃走したのだった。はたしてみんな無事に逃げ延びて再会し、帰国することができたのだろうか。藤村さんはまだ一波乱も二波乱もあったと言っていた。話はこれからクライマックスにさしかかるはず。私は窯元父子が戻ってくるのを待った。女性のこと、いずれ語られることだろう。

その日は大晦日。冷え冷えとした大連駅の片隅にある便所の裏に、懐かしい顔が揃った。しかも六つ。お互いの無事を喜び合うまもなく、奉天の近くの飛行場に最後まで和男と一緒に残った河島が、仲間の救出を提案した。大連第一中学校の校舎内に日本兵の捕虜が十数人収容されていて、処刑の日が近づいているというのだ。河島は派出所から盗んできたという手榴弾を一個手にしている。

「オレがこいつを監視所に投げ込む。警官たちがそっちに氣をとられているすきに、四人が捕虜を救い出し、校舎の外に誘導する。小野さんはそれまで外の見張りを務め、安全な場所を見極めてみんなをそっちへ案内してくれんか」

「ようし、わかった」

全員の気持ちが一つになった。河島はすでに何日も観察していて、夜中の十二時を過ぎると、看守が交代で仮眠をとるので、警護が手薄になることを突き止めている。そこを狙おうという。決まれば決行は早いほうがいい。その日の夜中に実行することになった。

午前二時過ぎ。和男が見張りをする位置から河島の姿が薄ぼんやりと視界に入り、その手が手榴弾のピンを抜くのがはっきりと見えた。

(一、二、三)

息を止めて数えた。

(投擲！)

と思った瞬間、河島の影が地面に吸い込まれ、あらぬ方角で爆発が起こった。
(どういふことだ)

何が起こったのか、すぐには理解できなかった。あとでわかったのだが、河島は不運にも深さ二十センチほどの側溝にはまって、両足を骨折してしまったのだった。

校舎内の監視所のほうで銃声が聞こえた。警官が動き出したようだ。こうなったら逃げられない。和男は闇の中を必死に走った。追っ手の足音が聞こえる。仲間たちがどうなったか、考える余裕もなかった。

道路の端を伝って走り。ときどき物陰に身を隠し、後方のようすを探った。足音がしなくても、追われているという恐怖感を拭い去ることはできなかった。息が切れる。

ふと、見覚えのある建物が目に入った。白蘭荘アパートメントだ。体が自然と建物の中に向かっていた。

(一階のいちばん奥の部屋)

かくまってもらうつもりだったのか、あとになってもよくわからない。だが、彼は思いとどまった。身についた危険察知能力が、まさにギリギリのところまで役に立ったということだろう。和男は白蘭荘の階段の下に身を隠して数十分を過ごし、追跡の気配がないことを確認したあと、石田家の床下のねぐらに潜り込んだ。

一睡もできないまま夜明けを迎えた。時折体が震えるのは寒さのせいだけではない。陽が昇り、気温が上がってきてようやくまどろむことができたのだが、朝食を運んできた石田の奥さんから、大連の全日本人に対し、この日の正午、大連神社に集まるよう指示が来ていることを聞いた。

「日本兵の処刑が行われるそうですよ」

それが昨晚の襲撃失敗に起因していることは、容易に想像できた。

「わかりました。私も行きます」

「いいえ、あなたは絶対行っちゃいけません。見つかったら殺されます」

奥さんはそう言ったが、和男の心は決まっていた。同志の最期を見届けないわけにはいかない。

正午少し前に、和男は綿入れの中国服に身を包み、マスクをして、大連神社の境内に集まっていた人混みの中に紛れ込んだ。日本人だけではない、多くの中国人も見物にやってきているようだった。

本殿の前にはすでに和男と行動を共にした五名を含む二十名におよぶ旧日本兵が、後ろ手に縛られ目隠しをして並ばされていた。たった一人、妙な格好でひざまづいている男がいる。顔は見えなくても、それが河島であることがわかった。人混みのなかで誰かの囁き声が耳に入った。

「あの人、監視所を爆破しようとして側溝にはまり、両足の骨を折ったらしいよ」

「そう？ 気の毒にな」

和男はマスクの下で歯を食いしばった。血がにじむほどに。涙が視界をさえぎったが、同じように悲しみをたたえた人々はほかにもいたので、目立つことはなかった。

処刑される側と同じ数の射手が、小銃を構えて並ぶと、境内に大きな声が日本語で響いた

「目隠しをとれ！」

銃弾を恐れはしないという、旧軍人の意地が発した言葉だった。全員の目隠しが外されると、間を置かず中国語の号令が下された。

「シエジ（撃て）！」

いつせいに銃口が火を噴き、仲間たちがバタバタと嵐の中の案山子のように地面に崩れ落ちた。

和男は視線を落とし、群衆をかき分けて足早にその場を離れた。嗚咽が漏れそうになるのをマスクに手を当ててなんとか抑え、十分ほどまっしぐらに歩いて、人影のない建物の影で溜めていたものを吐き出した。涙と鼻水がマスクをびしょびしょにし、これまでに出了たことのない声でしゃくり上げた。

その場にしばらくうずくまり、少し気持ちが落ち着いて立ち上がれるようになるまで、小一時間はかかっただろうか。

（なぜ自分だけが生きている。なぜ生かされているんだ？）

自問したが、答えは見つからなかった。

何もやる気が起こらず、ただ漫然と時を過ごしているうちに、ひと月以上がたった。ある日、愛川村の藤村の奥さんからの手紙を携えた使いの者が、石田家の戸をたたいた。ソ連兵が落ち着いてきて村の治安がよくなったから、こちらへ来て一緒に暮らさないかというのだ。

もちろん断る理由はない。石田家に迷惑をかけずにすむ。和男は石田の奥さんに心から礼を述べると、すぐに使いの者とともに馬車で愛川村へ向かった。

「前よりだいぶ色が白うなりましたね」

藤村夫人は懐かしそうに言った。

「けど、痩せちゃおらんでしよう。食事はちゃんともろちよりましたんで」

和男が相好を崩しながら言うのと、婦人もつられて笑った。

藤村家には、広大な田畑のほかに、果樹園、養豚場や養鶏場もあった。大勢の中国人が働いてはいたが、仕事は山ほどあった。春になるといつそう忙しくなり、和男は恩返しのために懸命に働いた。また、大連の石田家にも、馬鈴薯や野菜など収穫物を届けた。使いをやることもあったが、自ら馬車で届けることもあった。

このころは、望郷の思いは心の片隅にあっただけで、命の恩人のためにできる限り力になろうという思いが胸中を占めていた。また、身の安全を図るために、新しい戸籍を作ってもらった。つまり藤村家の養子になったのだ。金さえ払えば、簡単に戸籍を作ってもらうことができた。

しかし、そんな平穏な暮らしも長くは続かなかった。昭和二十一年の初夏にソ連軍が本格的に旧満州に進駐してきたからである。日本人が持つ立派な家にはソ連の将校が住むことになり、持ち主は当然のことのように追い出されてしまったのだ。婦人は働いてくれていた中国人に土地を均等に分割して与え、生活用品と衣類のほぼすべても分け与え、身ひとつに近い状態で村をあとにした。富農が一夜にしてほとんどの財産を失ったのだった。

大連での住まいはすでに手配してあった。ところが、その場所を告げられて和男は仰天した。白蓮荘アパートメントだというのだ。もちろん、驚きを隠し、知っているところと

はおくびにも出さず、目を伏せながらそこへ到着した。

幸い、二人の部屋は二階だったから、気をつけていれば麻生キヌ子と顔を合わせる機会を避けることはできた。建物へ出入りするときは、あたりをよく見回し、念のために帽子などで顔を隠した。それでも、たまにそれらしい人影を見かけることがあると、激しく動揺した。

しかし、藤村婦人は事情を知らないし、白蘭荘の住人がすべて日本人ということもあって、積極的に住人と交流するようになった。キヌ子と直接会ったことがあるかどうかはわからなかったが、あるとき和男にこう言った。

「聞いた話だけんど、一階の奥の部屋に住む麻生というおなごはおっとりしいおなごじゃら」

驚いて婦人を凝視すると、思いもかけない言葉が発せられた。

「密偵って知つとるな？」

「聞いたことはありません」

日本人でありながら、大連に住むほかの日本人のことを調べ、とくに金持ちの情報を地元の警察に密告して報酬を得る卑劣な人間のことだ。密告された家庭は警察の調べを受け、すべての財産を取り上げられた。その半分を密偵がもらっていると聞いていた。

和男はキヌ子の部屋に入ったときのことを思い出した。きちんと整頓された部屋には、こざれいな家具調度置かれていた。その日暮らしが圧倒的に多いほかの日本人と比べると、目を疑うような文化的な暮らしをしていた。それは密偵で得たものののだろうか。彼女に対して抱いていた警戒心の正体がわかったような気がした。しかしそれは、想像をはるかに超える危険なものにちがいがなかった。

当然だが、彼女に対する気持ちは以前とちがうものになった。自分でもどう分析していかわからない部分もあったが、女性としての魅力を感じることよりも、人としてあるまじき行為への憎悪がまさっていた。なぜなら、密偵の被害に遭ったいくつかの事例を耳にしていたからだ。藤村の義母も標的にされてもおかしくなかったが、実際、財産はほとんど手放していたし、けっして偽装ではなく生活のために、義理の息子の和男は、毎朝早くから市場へ出かけて野菜を仕入れ、荷車に乗せて売り歩く商売をやっていたから、はたから見ても富豪とは思えなかったはずだ。

とはいえ、やはり麻生キヌ子との接触は避けたいと思い、常に気を配っていたのだが、ついにそのときはやってきた。急ぎの用があったために、多少警戒心が薄れていたのだから、階段を駆け下りたところではったりと彼女に出くわしてしまったのである。

「あっ！」

和男は思わず声を上げた。

「あら」

二人は顔を見合わせた。二、三秒か、あるいは五、六秒だったかもしれない。無言で目を見つめ合った。先に口を開いたのはキヌ子だった。

「小野さんといったわよね」

（覚えられていた！）

和男は黙ってうなづいた。

「なしてここにおると？」

「あ、ちよつと親戚のところ」

ここに住んでいることは知られたくなかった。

「あつ、そう。親戚がある？」

一刻も早くこの場を逃れたかったが、なぜか口のほうが早く動いていた。

「あんた、いまん仕事はやめたほうがよかです。ひとから恨まれますよ」

キヌ子は唇をつんとあげ、二、三步和男に歩み寄ってから言った。

「心配ご無用。アタシの身の安全は中国の警察がちゃんと保証してくれるから」

「でも、日本に帰ったら」

「わかるわけがないわよ」

笑い飛ばす彼女の口調には、不安のかけらもなかった。そして、さらににじり寄ると、声を潜めて言った。

「また来なつせよ、アタシの部屋に。わかるよね」

首をひねって奥の部屋に視線を送るキヌ子に対し、和男は相手の顔を見据えたまま口を真一文字に結んだ。もちろん、その後彼女の部屋をのこのこと訪ねることはなかった。そして、次に会ったのは帰りの船の中だった。

人の運命とは不思議なもので、想像を超えた境遇に突然身を置くことがある。和男の場合はそれがおかしくなるほどはなはだしい。荷車を引き、大連市中で野菜を売っていたときのことだ。とろとろと走ってきたソ連軍のジープが、目の前で突然エンストを起こした。降りてきた二人のソ連兵がボンネットを開けてあちこちいじくっていたが、エンジンはうんとすんともいわない。

そのようなを見て、和男はジープに歩み寄った。たいていの乗り物の構造はわかってから、エンストの原因を突き止める自信はあった。まず、電気系統を調べると問題はなし。そこで、キャブレターに障害が起こっていると見当をつけ、兵士が持つ道具箱からスパナとドライバーを借りてキャブレターを外してみると、口のところにコリーヤンが一粒詰まっているのがわかった。それを取り除き、燃料をポンプで送り込んでエンジンをかけると、一発で始動した。和男は運転席に乗り、広場を一周して戻ってくると、ソ連兵が大喜びで「ハラショー、ハラショー」と叫んでいた。

その日はそれで終わったが、次の日、同じ場所で店を開いていると、ソ連兵が日本語のわかる通訳を連れてやってきた。

「部隊長がお礼をしたいと言っています。同行願えますか？」

そのとき、たまたま一緒に店番をやっていた義母が、血相を変えた。

「行っちゃいけん、捕まえられるかもしれん」

しかし、ソ連兵の役に立つことをしたのだし、何かお土産をくれるかもしれないと義母を説き伏せて、ソ連の部隊へ行くことにした。

もちろん、捕まえられることはなかったし、それどころか、思いもかけない事態が待っていた。部隊長がこう言ったのだ。

「アナタノ技術ハスバラシイ。ゼヒワガ隊ニ入ッテ若イ連中ノ指導ヲシテホシイノダガ」
（ソ連兵をたたき殺して飛行機を燃やし、捕虜になった自分がソ連の隊にだど？ コーリヤン一粒で？）

と、和男は我が耳を疑ったが、相手は真顔だ。

「義母が体が弱いから、家を離れるわけにはいかないのよ」

といったんは断ったのだが、ジープを一台あげるから、それで通えればいいという。車なら三十分もかからない距離だ。和男は考えこんだ。

（ソ連兵による旧日本兵狩りも続いていると聞く。こりゃあ、むしろ敵の懷に飛び込んだほうが安全かもしれないぞ）

そう考え直して、協力を引き受けることにした。

最初はどういう身分で部隊に所属するのかわからなかったが、まず三カ月間ロシア語の訓練を受けた。それが終わると、部隊長の身の回りの世話をする当番兵となった。部隊長が出かけるときはジープの運転を、間の時間に若い部隊員に車両の整備の仕方や運転技術を教え込むのである。日本人より覚えが遅いと感じた。

あつという間に一年近い日々が過ぎ去り、自分では意識しないうちに、和男は立派なソ連兵の一員となっていた。十分といえる給料ももらっていたので、野菜売りをやらなくても、義母と二人、余裕のある生活を送ることができた。

白蘭荘では、その後もたまに麻生キヌ子と出くわすことがあった。たいていソ連兵の制服を着ていたから、彼女がそれを驚きの目で見つめたのはいうまでもない。なぜそうなったのか、本人でさえよくわかっていないのだから、端の人間に理解できるはずがない。いずれにしろ、圧倒的なソ連軍の力をバックにしている和男は、義母ともども、完全にキヌ子のターゲットからは外れていた。

ある日、和男にとっては久々にワクワクするような出来事があった。ディーゼルエンジンつきの大型トラックが部隊に到着したのだ。ドイツ製で、スリーポイント・スターのエンブレムがついていた。写真だけはどこかで見たことはあったが、ホンモノはもちろん初めてのこと。

和男が目を見張らせてボデーをなで回していると、部隊長がやってきて、試運転をやってみろという。和男は喜び勇んで運転席に飛び乗った。そして広場を二周。途中でバックして向きを変え。もとの位置に戻ってくると、満足げな部隊長の笑顔が待っていた。そしてその場でなんと、トラック班の班長を命ぜられたのだ。ソ連兵の部下が二十四名もつく。

班のメインの仕事は、旧日本兵の捕虜をトレーラーにぎゅうぎゅう詰めに乗せて、トラックで牽引し、旅順の要塞の破壊作業に従事させることだった。捕虜が和男の顔をじろじろ眺め回して、ときにはロシア語でこう話しかけてきた。

「ロシアニモ、日本人ソックリノ顔ヲシタノガイルンダネ」

和男はすまして、

「私ニハイワノフトイウ立派ナロシア人ノ名前ガアル」

と、わざとたどたどしい日本語で答えたが、やはり同胞への親近感はいくつかあるもので、ときには捕虜のためにサービスをした。途中の道端にスイカ畑があると、停車してトレーラーのドアを開けてやる。彼らは喜んで畑に入り、熟れたスイカを抱えて戻ってくる。トウモロコシ畑でも同様のことをした。いつしか、和男は捕虜たちから「イワチャン、イワチャン」とよばれ、人気者となった。

昭和二十四年の春までは、このようななんと不思議な日々が続いていたが、三月二十日過ぎだったと記憶している。出勤して間もない時間に、義母が勤務先の兵舎まで馬車で

やってきた。和男が何事かと思ひ出て行くと、

「引き揚げ船のくじが当たった。今日乗るから、すぐに部隊を抜け出して」

と言う。急な話だ。このところは安定した暮らしを送っていたから、それに流されつつあったが、望郷の念は消えるものではない。頭のスイッチがさっと切り替わって、故郷への思いに満たされた。

さて、どうしたものか？　すぐに妙案が浮かんだ。部隊の入り口に店を構える床屋があり、和男も馴染みの客となっている。この中国人のオヤジが大の車好きで、いつもトラックが店の前を通り過ぎるのをうらやましそうに眺めてつぶやいていた。

「ワシモ一度デイカラ、アノ大型トラックノ運転ヲシテミタイヨ」

この日も午前十時に捕虜を乗せて部隊を出発し、旅順に向かうことになっていた。和男は時間通りに出発すると、床屋の前に車を止め、オヤジに歩み寄って耳元で囁いた。

「ボクは急に日本に帰ることになった。前々から部隊長に推薦していたのだが、あんたがボクの代わりにトラックを運転することになった」

床屋のオヤジは目を丸くして叫び声を上げた。

「ベント、ベント！」

彼がくしとはさみを放り投げ、ベントに飛び乗って走り出すのを見届けたあと、和男は素早く義母の馬車に乗って、大連市街に戻った。

戦時中は海軍の病院船として使われ、戦後はおもに大陸からの引き揚げ船として利用されていた「高砂丸」の白い姿が、大連港の埠頭にあった。埠頭の入り口まで続いていた引き揚げ者の列に二人は加わったが、なかなか進まない。その理由は現地警察による厳しい身体検査が行われていたからだ。

みな、蓄えた財産の一部をなんとか持ち帰ろうと、金きんに変えて隠し持った。ステッキや靴底に仕込んだり、女性は髪の中や秘部に隠したりした。ところが、それらは金属探知機ですぐに見つかってしまった。なおも女性はみな下着を脱がされ、両足を開くという屈辱的な検査を受けた。

藤村の義母も少しばかりの金を持っていたが、やはり探知機に引っ掛かり、取り上げられてしまった。結局は誰もが無一文、身ひとつで帰国することになったわけで、年配の引き揚げ者の憔悴しきった顔の中には、長い間の大陸での労苦が無に帰した無念さがにじんでいた。

和男としては、そんなことよりも、ソ連軍が連れ戻しに来るのが心配で、落ち着くひまがなかった。

（一刻も早く出航してほしい）

何度そう願ったことか。結局、くじに当たった人々が全員乗り終えるまでには、まる一日かかった。エンジンの振動が床に伝わり、汽笛が鳴って船が離岸すると、和男はおそるおそるデッキに出て、埠頭に追っ手の姿がないことを確認し、ようやく胸をなで下ろした。

「お義母さん、もうだいじょうぶですよ。もう」

前夜一睡もしていなかったこともあり、和男は義母の傍らで、あつという間に眠りに落ちた。三日後には舞鶴港につく。それまで。長い逃亡生活の中で足りなかった分の睡眠時間を少しでも取り戻せたらいい。

しかし、そうはさせてもらえなかった。一日目の午後、船が玄界灘にさしかかったとき、比較的穏やかだった空気が一変した。甲板でマイクを手にした男の怒鳴り声が、スピーカーで船全体に響き渡ったのだ。

「この船には密偵が乗っている。日本人同胞の生き血を啜った卑怯者の密偵は出てこい！ おまえたちにはけつして故郷の土は踏ませない！」

船内がにわかにざわつき始めた。そのとき、和男は炊事当番が回ってきたので厨房に入ったところだった。甲板の騒ぎはここでもよく聞こえる。すぐに麻生キヌ子のことを思い浮かべたのだが、まさか、自分の足もとで小さくなっておびえているなんて、想像もしていなかった。

「アタシはこの船で殺される。お願いだからかくまってちょうだい」

彼女は蚊の鳴くような声で言った。和男はあたりを見回した。当番は十人くらいいるのだが、彼が一番乗りだったようで、幸い近くには人はいない。だからといって、自分にはどうすることもできない。視線を上方に保ったまま静かに言った。

「自分の身の始末は自分でつけんといかん」

女は恨めしそうに和男の顔を見上げた。そのとき、ドカドカと二、三人の男の靴音が厨房に届いた。

「こっちのほうに逃げてきたらしいぞ」

先頭の四十前後と思われる精悍な男と、和男の目が合った。もうキヌ子が逃げられるはずはない。かくまったりすると、こちらに累が及ぶ。和男は無言で目配せをした。若い男二人がうずくまっているキヌ子の肩をつかんで無理矢理立たせた。彼女は胸の前で革のボストンバッグを抱きしめている。かなり重たそうだ。

「カバンの中身はなんだ」

リーダー格の男が問いただした。彼女は答えない。男は力づくでバッグを取り上げ、フアスナーを開いた。とたんにまばゆい光沢を放つものがバラバラッと飛び出し、床で鈍い音をたてた。指輪、腕輪、ネックレス、タイピン、その他ひと目見ただけでは用途がわからないが、金製品であることは明らかなのだが、そこに散らばっていた。

「お前！」

怒声が厨房に響く。リーダーは床に落ちたものを拾ってバッグに戻し、若い男に目で合図をした。一人はキヌ子の髪の毛をわしづかみにして引立て、もう一人が背後から腕をひねり上げた。

「うっ」

キヌ子は低いうめき声を上げたが、無駄と思ったのか抵抗はしなかった。

しばらくして、甲板の騒ぎがボリュームアップした。キヌ子が引きずり出されたからだろう。和男はあらぬ疑いをかけられないよう、甲板でこれから起きることを見届けなければならぬと思った。勇気を振り絞ってブリッジの下にせり出した最も広い甲板に向かう。そこではすでに、クライマックスシーンが展開される準備がととのっていた。

後ろ手に縛り上げられ、下段の甲板から見える手すりのところで身を晒していたのは、キヌ子だけではなかった。もう一人、四十歳前後と思われる男がいた。二人とも全裸にさせられている。男の足もとには、妻と思われる腰巻きだけを身につけた女と、上等の服を着込んだ十歳くらいの男の子がうずくまり、しゃくり上げていた。そして、白い制服を着

た乗組員と乗客との間でもみ合いが起こっていた。

「船の上では殺さないでくれ。内地に帰ったら警察が処分してくれるはずだから引き渡せばいい。前の船にも密偵が乗っていて殺されたが、我々としては迷惑だから、人殺しだけはやめてくれ！」

制服姿の年配の男が必死に頼み込んだが、

「うるさい、船長は引っ込んでいろ！」

という怒号が飛んだ。圧倒的多数の乗客の前に、船長の抵抗はそれまで。他の船員ともども船長室に監禁されてしまった。

儀式はまず、密偵の戦利品の分配から始まった。二人から没収した金製品などは、密偵のために財産を失った人々に均等に分配され、身につけていた服は、特にみすばらしい身なりをしていた者に分け与えられた。差配はマイクを握っていた引き揚げ団長が中心になって進められた。不平不満が出ないところをみると、公正に行われたのだろう。

そして最後の段階がきた。まだ冷たさを感じる風の中で裸の体を晒した二人に、何人かの男がにじり寄っていく。その表情は憎悪に満ちていた。

「まず、俺にやらせてくれ」

声を絞り上げたのは、ありもしない財産の隠匿の疑いをかけられ、働き盛りの息子三人を過酷な労役にとられて、過労と栄養失調で失った老人だった。キヌ子の密告が原因である。老人はこうもり傘の柄を胸に当て、とがった先端を前に向けると、キヌ子に向かって突進していった。肉の裂ける鈍い音がして、先端が胸に突き刺さった。

「ギャーッ！」

この世のものとは思えない悲鳴が起こったあと、老人が傘を引き抜くと、キヌ子の胸から鮮血がほとばしった。老人は元の場所に戻り、勢いをつけて再び突進する。その目に宿るのは、もはや狂気としかいいようのないものだった。傘の先端は別の場所に刺さり、悲鳴とともに二筋の血潮が瞬く間に床を染めていく。

「じいさん、もういいか」

中年の男が肩で息をしている老人の背中をさすり、得物を固く握りしめていた指を一本一本ゆくりとはがした。その男も、武器を手にしたとたん目が血走り、「ウォーッ！」と雄叫びを上げてキヌ子に体当たりしていった。彼もまた、彼女に対して激しい憎悪を抱いていたのだ。

その後も何人かがあとに続いた。キヌ子はもう声を上げなかった。いつ息が絶えたのかさえもわからない。続いて、もう一人の男もリンチの犠牲になった。その妻は服を奪われただけで、命まではとられなかったようだ。

二つの死体は、やがて海に向かって放り投げられた。とたんに大きな魚が群がってきて、獲物に食らいついた。フカ（サメ）である。瞬く間に死体は消え失せた。フカたちは、以前にも同じ場所でも人肉を食らい、それを覚えていて待ち構えていたのだろうか。

和男は一部始終を見届けた。すべてが終わったあと船室に戻り、横になっていた義母に報告した。もちろん、見たままを伝えたわけではない。

「あのおなごは殺されました」

ただそれだけ。義母もまた、

「そうかい」

と言って、ひとつ大きな息を吐いただけだった。

9

漆黒から濃紺に変わりゆく東の空に、うつすらと紅がさし、明るさが増すにつれ、山の稜線が徐々に際立ってきた。午前六時過ぎ。登り窯の火入れからすでに十六時間がたっていた。

「調子にのっち、ちいっと、しゃべりすぎましたかな」

やや後悔の色をにじませて、藤村さんがつぶやいた。むろん、聞き役の三人はそれを否定した。私の視界の中には、窯の口からのぞく眩しい光がある。一千度を超えるあの炎が、藤村さんから秘話を引き出すきっかけとなった。

「苦労、されたんですね」

窯元が地面を見つめたまま言った。

「戦争さえなければ、することはなんもなか、いらん苦労でした。そっでん、私は生きながらえち、まだよかほうですよ。あの時代には、私よりもずっとひどか目におうち、わけもわからんまま命を落とした人がいっぱいおりましたもんね」

実感のこもった言葉だった。この私でも、いろいろな機会に戦争体験を耳にすることはあった。理不尽に命を奪われた人が数え切れないほどいたことを聞いている。無念さを訴えたくても口にできなかった人のほうが圧倒的に多いはず。だからこそ、過酷な運命に立ち向かい、生き抜いた人の話を聞き逃してはならない。背景となった戦争の悲惨さや愚かさ、浮き彫りになるからだ。しかも、後世に証言が残されることの多い集団的な体験ではなく、藤村さんの場合はほとんど個の体験。実に希有な例といえる。

「戦争が終わっても、人間同士の命のやりとりは終わらんだったんですね。戦争てそんなもんです。人を狂わせます。やけん、戦争はしちゃならんち強う思います」

最後に聞いたその言葉は、私の心の奥にとげのように刺さって残った。一見、屈託がなさそうに思える藤村さんだが、長い間、重たいものを背負って生きてきたことがはつきりと伝わってきた。

遠くからバイクのエンジン音が聞こえてきた。新聞配達だろう。山あいの村に日常が戻りつつある。少し前まで異空間だった登り窯の前も、憑き物が落ちたかのように石と土だけの日常空間となった。舞い込んできた枯れ葉が、土の上で踊っている。

ふと窯元と目が合い、どちらかともなく会釈を交わした。これから午後八時くらいまであと十四時間ばかり、窯元父子の火の番は続く。数時間ずつ交代で睡眠をとるという。

「ギー、ドン」

唐臼の音が、先ほどより近くに感じられるようになってきた。

(了)